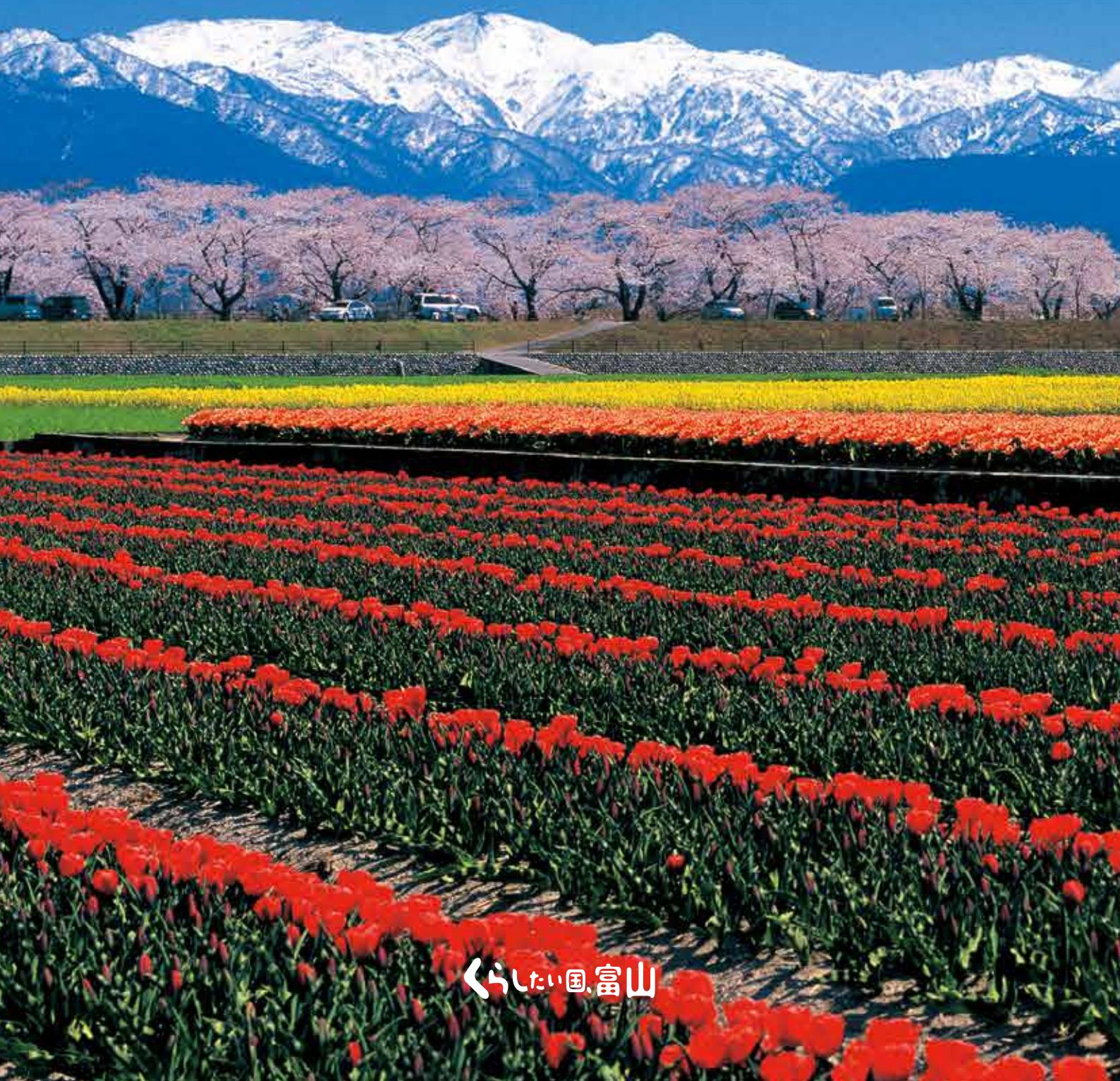


めくる、めぐる、富山な暮らし

とやま日季

につき

2012 春号



くらしたい国、富山

2 表紙の写真

とやまカルチャー

砺波市美術館

おいしい暮らし

案内する人 済木 育夫 さん

富山対談

建築家 磯崎 新 × 富山県知事 石井 隆一

とやま暮らし日季

生きる力は自然がくれる 自分の手と体を使い、暮らしを楽しむこと。

とやまストリーム

物語とともに紹介されたとやまの極上たち。

とやま・ときの旅語り

富山市・長慶寺 五百羅漢

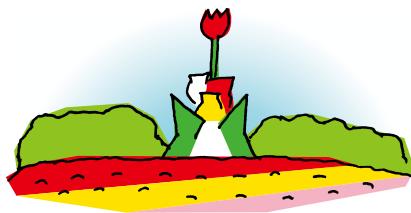
東京で、富山に逢える。

とやまの発酵丸の内リトリート
チユーリップ・ファンタジア
入善町ジャンボスイカイベント

いいモノ、いいコト。

井波彫刻品

表紙の写真

自然と人に愛された、
富山の春の花たち。

チューリップの球根や切花の産地として知られる富山県。4月下旬から5月上旬にかけて、「となみチューリップフェア」が開かれる県西部の砺波市や、高岡市、県東部の入善町などで、畠一面のチューリップが楽しめます。

表紙の写真の、県東部・朝日町の舟川べりの風景も見事です。白い雪を冠った朝日岳を背景に、桜並木、菜の花、色鮮やかなチューリップが織りなす絶景。自然と人の暮らしが一体となった、富山ならではの春の贅沢です。

とやまカルチャー

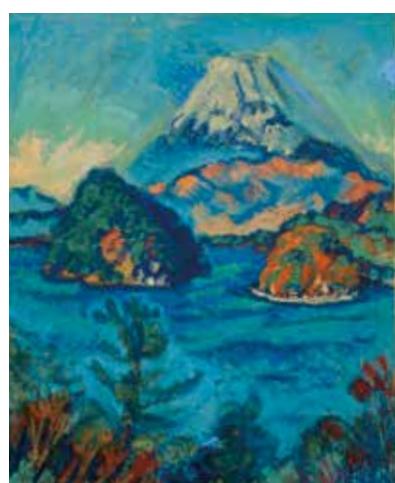
となみ野の人とともにある、美術館。

チューリップ公園の東、豊かな田園風景が広がる一角に砺波市美術館があります。1997年に開館し、4月で15周年。大規模な企画展をはじめ、常設展では郷土の作家の作品展示、ロベール・ドアノーの写真コレクションなど、多彩な展示で知られています。砺波地方の文化・創造活動の拠点として、市民が美術に身近に触れ、自ら創造する場として「市民アトリエ」や「市民ギャラリー」があります。講座やワークショップも定期的に開かれ、人気となっています。

砺波市美術館

富山県砺波市高道145-1 TEL 0763-32-1001

開館:午前10時から午後6時まで 休館日:月曜日(祝日・休日の場合は開館)、年末年始

<http://www.city.tonami.toyama.jp/shisetsu/bijyutsu/bijyutsu.html>


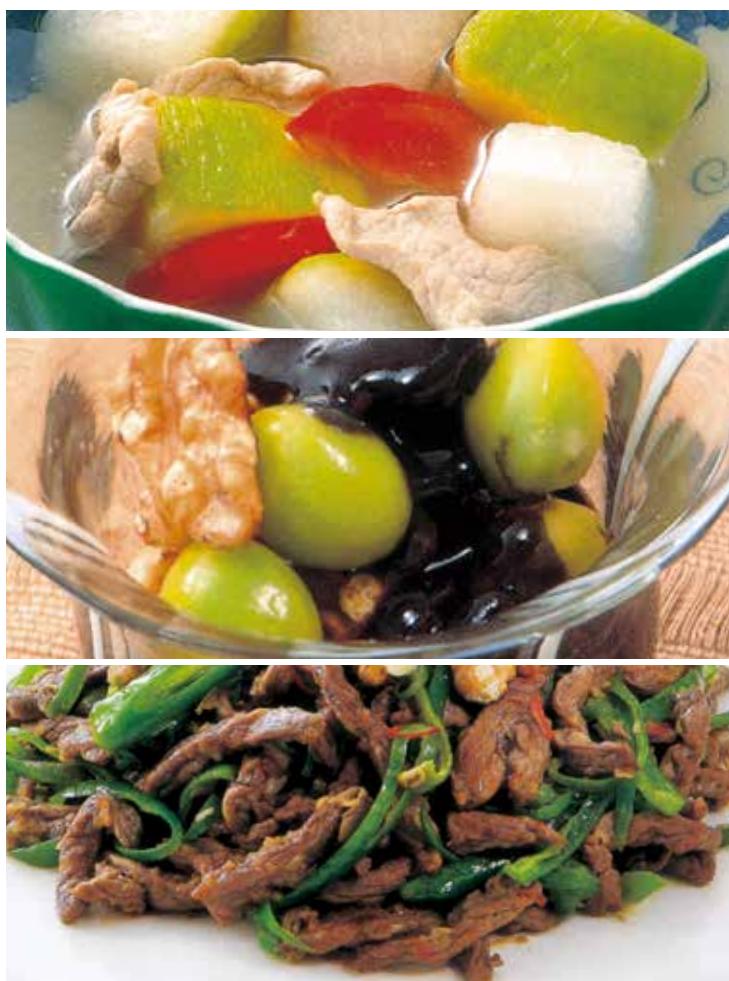
梅原龍三郎 《富士山図》 1945

チューリップと合わせて、梅原の「花と名峰」を。

開館15周年記念展として、4月14日(土)から6月3日(日)まで、「梅原龍三郎 花と名峰」を開催。4月25日(水)からの、となみチューリップフェアと合わせてご覧になってみませんか。

案内する人
済木 育夫さん

「薬膳」とブランド化



出典：辰巳洋著「薬膳の基本」緑書房

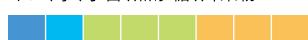
寒 涼 平 溫 熱

写真上から

【夏】 冬瓜のスープ：冬瓜、トマト、豚ももスライス肉、水、醤油、塩



【冬】 胡桃と銀杏の黒胡麻ソース：胡桃、生銀杏、黒胡麻ペースト、赤ワイン、水、丁香、黒砂糖、片栗粉



【冷え性対策】 牛肉としし唐の炒め物：牛肉赤身ブロック、しし唐、胡桃、サラダ油、塩、胡椒、にんにく、葱、生姜、赤唐辛子、醤油、紹興酒、片栗粉



済木育夫

さいき・いくお

富山大学和漢医薬学
総合研究所 所長

冷え症に良い料理や冬に適した料理をカラーコード化すると、オレンジ～赤の色イメージ(温/熱の食材)の増加として理解しやすく表現される。詳細は下記。

「くすりの富山」は、「薬膳の富山」であります。

漢方医学では、気・血・水が過不足なく、滞りなく体内を巡っていることが健康な状態であると考えられています。食事によって、この気・血・水のバランスを維持することも食養生の目的の一つです。「医食同源」あるいは「薬食同源」といわれるようこの食養生を大切にし、数千年の歴史の中で「未病を治す」知恵(予防医学)が培われてきました。これが今で言う「薬膳」の元になるもので、食材の性質や働きを用いて、毎日の食生活から体の機能回復や病気の予防を図ることを実践してきました。

薬膳とは、個人の体质や体調、季節に合わせて食材や調理法を選び、料理をつくって食べることで体全体のバランスを整えていくことなのです。

夏が旬のスイカは体を冷やし、冬が旬のカブは体を温める。旬のものを食べることは、薬膳の理にかなっているのです。富山県には、こうした薬膳料理

がたくさん作られています。また、食物や薬物の性質や効能について「五性」という一つの考え方があり、食物の性質を「寒」「涼」「温」「熱」「平」の5つに分け、身体を温める作用と冷やす作用で分類しています。このような食材を体調に応じてバランスよく摂ることで、健康維持や疾病の予防が期待できることになります。

例えば、冷え症の人や虚弱な人は、身体を冷やす食品を避け、温める作用のある食材をなるべく火を通して用いるよう気をつける必要があります。

私たちの研究所では、漢方薬の構成生薬や様々な食物などの性質であるこの「五性」を利用し、その対応したカラーリメージに変換することにより、漢方処方、薬膳、薬膳食材などを色で視覚化するとともにそのデータベース化を試みつつあります。このことは薬膳の創作や商品などの開発、比較標準化あるいはブランド化などに何らかの役に立つのではないかと思っています。

建築家

磯崎 新



富山県知事

石井 隆一

利賀から世界へ

石井 磯崎先生には、何かとご縁があ

ります。四半世紀前、北九州市での勤務時代、先生の設計された市美術館、西日本総合展示場などを建築科の学生たちが東京などから勉強に来ていたのが印象的でした。静岡では、野外劇場や楳円

世界を舞台に活躍する建築家、磯崎新氏を迎える。石井隆一富山県知事が、利賀芸術公園の建築物や富山県[立山博物館]の設計にあたっての想いなどについてお話を伺いながら、富山の魅力、可能性について語り合いました。



あしたへつなぐ 富山対談



堂の適地を求めて夜間に懐中電燈を手に一緒に有度山（うどやま）を巡り歩いたことも懐しい想い出です。富

山県では、先生に、利賀芸術公園の建築物や、立山博物館などを設計していくだけだった。

利賀を拠点として、劇団SCOTの



富山県利賀芸術公園 野外劇場

世界的に活躍されていますが、利賀山房や野外劇場などの設計にあたつての先生のお考え、ご苦心についてお伺いします。
磯崎 60年代半ば、私は日本の前衛やアングラ演劇などをやっている人たちとの付き合いがあり、そこで、鈴木さんとのお付き合いも始まりました。最初は、私は、鈴木さんをお手伝いするというよりも、鈴木さんの演劇の観客でした。当時は演劇も東京を中心になつていて、多く人達ばかりでしたが、それでは本当の演劇は成り立たない、むしろ、人里

離れた田舎に拠点をつくるというの

が鈴木さんの意図でした。以来、35年の
お付き合いです。私は劇団SCOTの

「座付き建築家」と言っていますが、鈴
木さんもそう紹介してくれるようにな
りましたね(笑)。

鈴木さんは、合掌造りの建物が消滅
していくなかで、それを活用した新し
い稽古場をつくりたいと考えていた。

鈴木さんには組み立ててきた演劇の理
論があります。演者の身体には、生まれ
ついて生活してきた家の雰囲気、空間、
様々な仕草などが染み付いている。こ
の染み付いている日本人の身体の伝統
的なものの中から新しい演劇をつくり
出すのが自分の仕事だと考えていました。

ですから、ギリシャ悲劇をやりながら
も演出は日本の伝統的なものとなつた
のだと思います。

これは建築も同じで、伝統的なもの
と近代の新しいものが、どう重なるか
ということが一番のポイント。演劇で
実践しているのが鈴木さんで、それを
建築的にフォローするということは、
新しいタイプの舞台を作り上げること
でした。舞台というのは、いわゆる装置
ではなくて、観客と演者との間の関係
とその匂いですね。それらを舞台とし
てどうつくるかを考えたいと思い、お

手伝いを始めたわけです。

鈴木さんに感心したのは、東京を通
さずに、利賀からいきなり世界に出て
いこうと考えたこと。私も九州にいた
のですが、東京に関心はなく同じ感覚
でした。日本の中心でない所から世界

に近い部分での日本建築のエッセン
スがそこにあるからです。

一方、野外劇場はギリシャが始まり
ですが、ギリシャ悲劇は演劇の根源で
すから、根源であるギリシャのそのま
まのものを合掌造りの真ん前に持つ
てこようと考えたんです。ルネサンス
時代に解釈されたローマ時代の半円
形劇場の基準をもとに、そのままのや
り方で舞台をつくりました。

他方で、野外劇場の前には池があり、
奥に神体山になるような姿の山があ
り、舞台は池に向かつて突き出してく
る。元はと言えば雅楽の舞台であり能
舞台です。見える背景は日本ですが、觀
客が座っている側は、ギリシャである
という関係をつくってあります。それ
に、ギリシャ劇場はその後の何千年か
の世界の劇場の中でも一番よく声が通
る形になっています。

との関係をつくりたいということでは、鈴木さんも私も、ずっとぶれずに來
たという感じです。

石井 利賀山房や新利賀山房は、非常
に日本のですし、野外劇場はギリシャ
風にみえます。一見、異なる特色を持
つ、二つの建物をほぼ同時期に設計さ
れていますが、どのような狙い、お考
えでしようか。

利賀山房において、合掌造りそ
のものの骨組みを残すのは、一番生活
スがそこにあるからです。

一方、野外劇場はギリシャが始ま
りますが、ギリシャ悲劇は演劇の根源で
すから、根源であるギリシャのそのま
まのものを合掌造りの真ん前に持つ
てこようと考えたんです。ルネサンス
時代に解釈されたローマ時代の半円
形劇場の基準をもとに、そのままのや
り方で舞台をつくりました。

一方で、利賀山房の民家の骨組みやアルミ
の黒の床、背景の襖や戸なども、その
後の鈴木さんの舞台の基本パターン
になりました。また、合掌造りの天井
演劇にはなかつたものです。おそらく、
利賀山房という空間があつたか
ら、スズキスタイルが固まつていった
のではないかと思います。

利賀山房の民家の骨組みやアルミ
の黒の床、背景の襖や戸なども、その
後の鈴木さんの舞台の基本パターン
になりました。また、合掌造りの天井
演劇にはなかつたものです。おそらく、
利賀山房という空間があつたか
ら、スズキスタイルが固まつていった
のではないかと思います。

ましたが。確かにすごく声が通りますね。
ですが、利賀の野外劇場のように、前に
池を置いたり、山があるということは
なかった。あれは先生のアイデアな
でしようか。

磯崎 利賀で私が感じたのは、この池
と山というのは日本古来の、神様をお
からでしようか。

利賀で私が感じたのは、この池
と山というのは日本古来の、神様をお
招きして演劇を奉納するという、日本
の演劇の一番の始まりの形式と同じ
ではないかということ。山の緑と池の
水を借景しました。借景を生けどりし
たうえで芝居に組み込む。だから舞台
の背景はいらないわけです。これは鈴
木さんも気に入ってくれました。池や
山がどんどん演出のアイデアを広げ
ているのではないかでしょうか。

利賀山房の民家の骨組みやアルミ
の黒の床、背景の襖や戸なども、その
後の鈴木さんの舞台の基本パターン
になりました。また、合掌造りの天井
演劇にはなかつたものです。おそらく、
利賀山房という空間があつたか
ら、スズキスタイルが固まつていった
のではないかと思います。

石井 演劇の立場から、こういう舞台、
建物であつてほしいということがある
一方で、建築が演劇に良い影響を与え
るということもあるわけですね。



れをひっくり返して屋根にしたのです。

利賀や立山で学んだのは、近代の文

化が技術として理解していったものと

は違う、日本の土地にある文化の姿、建

築物や風習、信仰など、そうしたもので

なんとかカタチにして、その一種の長

い道を通って、橋をわたり、向こう側、

違う世界を見るということですね。利

賀で初めて演劇フェスティバルが開催

された頃、東京から新幹線に乗つて、名

橋を渡つてお堂に入り、真つ暗闇のな

かでお説教を聞く。そして、終わつたと

たんに戸を開くと立山が見えるという

演出がなされていました。信

仰の歴史とともに日本の演劇の基本が

ここにあるのではないかというぐらい

に思いました。

そこでは、橋が重要な役割を果して

います。こちらの世界と向こうの世界、

この世からあの世へと2つの違う世界

をつなぐものとしての橋。その橋を渡

り、真っ暗闇の中でお説教を聞き、お説

教が終わつた瞬間にぱつと開くとい

うことで、その劇的な仕掛けを、遙望館では新し

くデザインしようとしました。

また、日本古来の建物の考え方は何か

と考えているうちに「空舟（うつおぶ

ね）」という言葉に行き当りました。空

舟というものが、すべての人間を包み込

み、移動させる原型だということで、こ

富山の自然にはかなわない

石井 利賀山房や野外劇場、立山博物

館の設計に携わつていただいたりする

なかで、富山県にどのような印象をお

持ちでしようか。



自然全体を博物館と見て

石井 先生には、立山博物館の展示

館、遙望館を設計していただきまし

た。お陰様で、昨年、開館20周年を迎えた。

ましたが、設計のコンセプトをお聞か

せください。

磯崎 立山信仰において一定の場所か

ら先は女人禁制で、男だけが立山に登

ることができたという話に興味を持つ

て、聞いていくうちに、どうやら、立山

博物館のある芦嶋寺（あしくらじ）の地

には、日本の神話的な山岳信仰の基本

形、地形や礼拝のシステムすべてが残

っているのではないかと感じました。

そこで、そういうものも含めたあの

自然、街全体を、博物館と見たらどうか

と思つたのです。

布橋灌頂会（ぬのばしかんじょうえ）

では、女性たちが目隠しをして赤い布

石井隆一

いしい・たかかず／富山県知事。東京大学法学院卒。埼玉県、石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に『分権型社会の創造』、『地方分権時代の自治体と防災・危機管理』など。

磯崎 研波の散居村のように平野に防風林で囲った民家が点在しているという光景も珍しい。富山県は日本で一番住みやすい場所ですかね。

日本海側からの視点を

石井 磯崎先生も鈴木先生も、地方から東京経由でなく、直接世界の舞台で活躍されており、素晴らしい。先生は、バルセロナやトリノのオリンピックでも日々、メインのスタジアムを設計されて高い評価を受けておられる。日本や富山県の若い人達に、何かアドバイスをいただきたい。



磯崎 新

いそざき・あらた／建築家。東京大学工学部建築学科卒。63年磯崎新アトリエを設立。国内各地、バルセロナ、ベルリン、中国、中央アジア各国などで数多くの建築を手掛ける。81年に利賀合掌文化村（現・富山県利賀芸術公園）の利賀山房、82年には野外劇場を設計。89年から91年にかけて富山県[立山博物館]の設計に携わる。89年から同館顧問。

磯崎 これから日本がどうあるべきかを考えたとき、シベリアの方から日本海を通して富山県や日本列島を見た地図がありますね、あれを思い出してみると、いかに、何かアドバイスをいただきたい。

石井 激励、ありがとうございます。万葉集や国文学の大家の中西進先生は、かねて、日本文化の構造は南北だとされています。「南」は、近畿以南で、都性と一体になる。都への文化流入は多く思っています。

石井 磯崎先生も鈴木先生も、地方から東京経由でなく、直接世界の舞台で活躍されており、素晴らしい。先生は、バルセロナやトリノのオリンピックでも日々、メインのスタジアムを設計されて高い評価を受けておられる。日本や富山県の若い人達に、何かアドバイスをいただきたい。

本来、日本海というのは内海ですか
ら、内海に面した要に富山湾があるわけです。かつて裏日本と言われたが故に富山にはすばらしいものが残ってい
る。太平洋側の文明がかなりあやしくなつてきているなかで、今度は富山で
はないか。このような発想で、ものを考
えていく必要がありますね。

東京は今後、縮小していかなくては
いけないでしょうし、日本海側は色々なものが、きちんと残っているわけで
すからしっかりと考えないといけない。
私は本気で、表と裏はひっくりかえる
だろうと、そうならないといけないと
思っています。

石井 激励、ありがとうございます。万葉集や国文学の大家の中西進先生は、かねて、日本文化の構造は南北だとされています。「南」は、近畿以南で、都性と一体になる。都への文化流入は多く思っています。

磯崎 いま、現代の資本主義社会が、如何ともしがたい状態になりつつあります。一番の問題は、テクノロジーが自然を荒らしてしまったというこ
と。そのようななかにあって富山県は
圧倒的に自然が強いところです。この
強さの中で、大袈裟なことをやらず
に、利賀村や立山とお付き合いでき
ることは正解でした。これからは、自然
とどうバランスをとるかが、一番の課
題だと思います。

石井 確かにそうですね。いまでは、テクノロジーも太平洋側中心、東京中
心にやつきました。しかし、結果として、富山県には自然の良さが残り、豊か
で厳しい自然環境をそれなりに保全し
整備もして共生してきた。

先生のように世界で活躍してこられ
た方からご評価をいただくと、大変あ
りがたいし、勇気づけられます。本日は
どうもありがとうございました。

同時に富山県内の産業も、北前船や
壳漬業の流れから続く医薬品産業や

南方からだつたから。その「南」の文化
と環日本海の沿海州などのシベリアや
中国東北部などとかかわってきた「北」
の文化のせめぎ合いがある。日本文化
は「南」が主流だったが、「北」的なもの
があり、両者の融合と止揚によつて格
調を維持してきた、とされています。北
前船の時代には、日本海側がむしろ
「表」だったともいわれます。先生のお
話とも通じるところがありますね。

機械、金属、IT関連など、ものづくり
の伝統がしっかりとあり、農業に志を持
つて頑張っている人たちもいます。い
ま振り返つてみると、これから日本の
が目指さなければいけない方向の一
つに、富山県は実は先進的に向いてい
て、実績を出しつつある県といえるの
ではないか。こうしたことが、先般公
表された法政大学大学院の都道府県
別の幸福度ランディングで全国2番目
とされたことにもつながつてているよ
うな気がします。

先生のように世界で活躍してこられ
た方からご評価をいただくと、大変あ
りがたいし、勇気づけられます。本日は
どうもありがとうございました。



環日本海諸国図(富山県が建設省(現国土交通省)国土地理院長の承認を得て作成(平6総使第76号))



とやま暮らし日季

生きる力は自然がくれる
自分の手と体を使い、
暮らしがを楽しむこと。



田中利行さん、彩さん、竜生くん

小矢部市在住

自分たちの理想とする、山の恵み、里の恵みを、満喫できる場所へ。

富山県西部にある小矢部市岩尾瀧地区。周辺には森や棚田が広がり、自然の営みと人の暮らしが交わる、のどかな里山が広がっています。

大阪出身の利行さんと京都生まれの彩さん夫妻がこの地に移り住んだのは今から約2年前。小矢部市の「地域おこし協力隊」として採用され、小矢部での暮らしが始まりました。

現在、利行さんは小矢部市の嘱託職員として、主に周囲の山林の手入れを行なう「木こり」の仕事に従事しています。大型機械が入らない、手入れされていない森に入り、森林の間伐や枝打ちをするとともに、風倒木を使つた手作りの家具製作を行なっています。妻の彩さんは、低農薬の野菜づくりや家畜の世話を担当。夫婦には昨年11月に長男の竜生くんが生まれ、以来、子育ても忙しい日々を送っています。

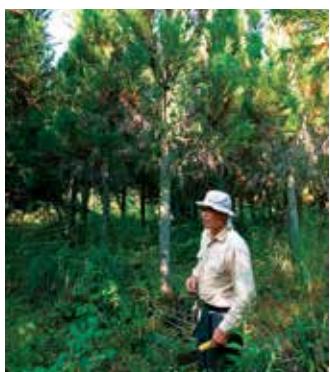
田中さん夫妻は以前、彩さんの実家がある京都の北山を拠点に、木こりや

農業の仕事に従事していました。しかし、「もっと自分たちの理想とする山の仕事、低農薬の野菜づくりをしながら地域を活性化させたい」と、富山に移り住むことを決意したのです。

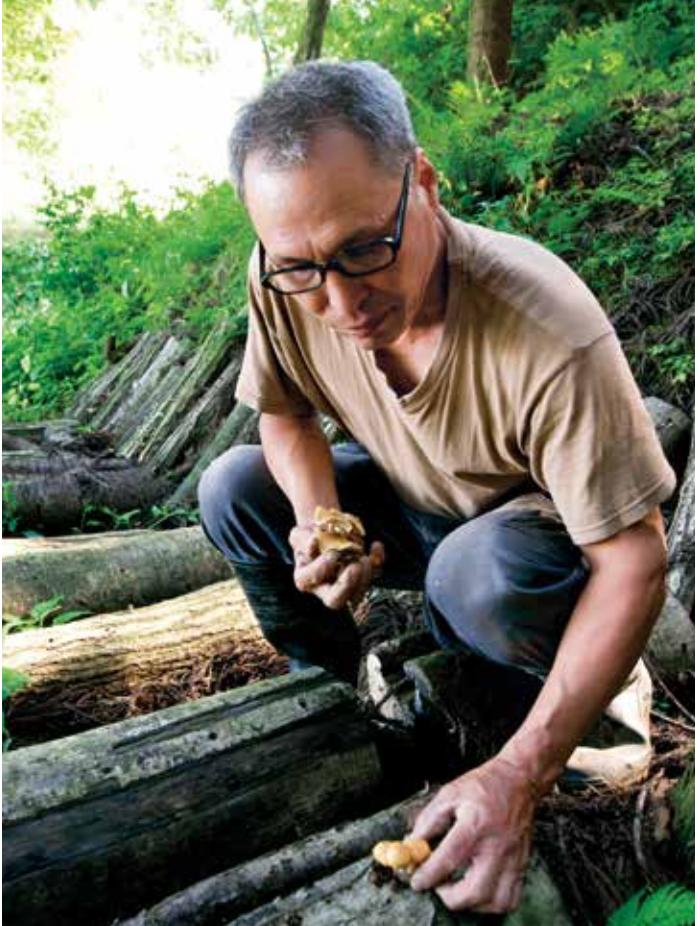
利行さんの実家は工務店で父親は宮大工でした。父の背中を見ながら、大工仕事や道具の使い方を自然に覚えて育った利行さん。熊本の専門学校で学び、卒業後は熊本や大阪で店舗設計や

家具製作、内装デザインの仕事に従事していました。その技術を生かして古民家を改築した現在の住まいには、利行さん手作りの木のお風呂やピザ窯、

家具などがあり、薪ストーブ用に間伐した木でつくった薪が積まれています。手間を惜しまず自分の体を動かしながら山里の恵みをいただき、暮らしを楽しむこと。親子3人の、手作りの温かな毎日が、そこにはありました。



近隣の山で間伐を行う。機械に頼りすぎない手仕事をモットーに。



左上:岩尾瀧地区周辺に広がる豊かな田園風景。 左下:釘を使わず、自然な風合いの家具をつくる。 右:秋にはキノコを栽培し、獲れたてを味わう。





左:京都にいたときから念願だったというヤギの世話をする彩さん。家の裏の畑を借りて、低農薬の野菜をつくっている。息子の竜生くんが生まれる前までは、利行さんの山の仕事もよく手伝った。 右:田中さんが石窯で焼くピザは、ソースも手作りの本格的なイタリアンの味。地元のイベントでも毎回、大好評で売り切れてしまうほど。



田中利行 彩 竜生

たなか・としゆき あや りゅうせい
2009年に京都から富山に「地域おこし協力隊」として移住。利行さんは木こりの仕事を従事。彩さんは野菜づくりを手掛ける。遊び心のある仕掛けで地域おこしに協力。

左:食事は料理が得意な利行さんが作る。この日の夕食は自家栽培のナメタケやヒラタケ、そして鴨肉を使った本格派パスタ。黒胡椒をアクセントに。 右:ニュージーランドのマウントルアペフで、世界各地から集まったレスキーの仲間たちと。

「ザイルクライミングもそうですが、レスキーの仕事で身につけた技術は、いまの山の仕事にすべて活かされています。機械が入れないような山の中では、いかに人の力と知恵を使って、自然と向き合えるかが大事なんです」

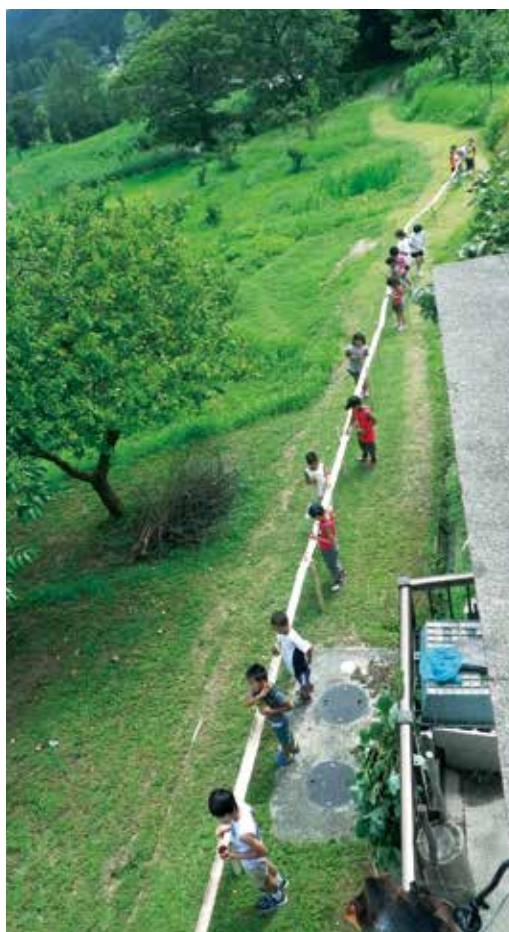
利行さんは店舗設計の仕事をしていた30代半ばの頃、もっと体を動かして体力を維持できるように木こりの仕事をしたいと考えるようになります。海外で本格的な山の技術と体力を身につけるため、40歳を越えてからニュージーランドに渡り、いまは世界遺産となつた国立公園・マウントルアペフのスキー場で、山岳レスキーの仕事に従事。現地の国家資格も取得し、氷河での高度なスキー技術やレスキュー法、アイスクライミング技術などを身につけました。日本でも奥志賀高原のスキー場でパトロール隊長やホテルの支配人をつとめ、日本とニュージーランドを10数年間行き来しながら、山の技術を自分のものにしてきました。

利行さんは店舗設計の仕事をしていた30代半ばの頃、もっと体を動かして体力を維持できるように木こりの仕事をしたいと考えるようになります。海外で本格的な山の技術と体力を身につけるため、40歳を越えてからニュージーランドに渡り、いまは世界遺産となつた国立公園・マウントルアペフのスキー場で、山岳レスキーの仕事に従事。現地の国家資格も取得し、氷河での高度なスキー技術やレスキュー法、アイスクライミング技術などを身につけました。日本でも奥志賀高原のスキー場でパトロール隊長やホテルの支配人をつとめ、日本とニュージーランドを10数年間行き来しながら、山の技術を自分のものにしてきました。

**人の力と知恵で、
自然と向き合う。**



左:出会いすぐに意気投合したという大窪孝信さん(右端)と。大窪さんも自然を活用した地域おこしを以前から考えていたとか。以来、危険を伴う山仕事にも一緒に出かけるなど、息の合ったコンビで地域のために働く。 右:昨年秋に生まれた竜生くんと夫妻。竜生くんには、人のために働ける人になってほしいと利行さん。



左端:地域の竹を使った50メートルの長さの流し素麺。
上・左から:枝打ちや薪割りなどに使う、斧や鉈。刃の部分は江戸時代や明治時代の古いもの。／間伐材や風倒木を使った椅子。防腐塗料を塗ればお風呂用にも使える。／スキー場のレスキュー隊員を経て、プロスキーヤーやスノーボーダーの板のテクニカルサポートをしていたという田中さん。その才能は実に多彩だ。



岩尾滝地区や小矢部市内で開かれるイベントでも、さまざまな協力を続ける田中さん夫妻。昨年の夏には、児童会のイベントとして、自宅裏の畠の傾斜を利用した長さ約50メートルの流し素麺を企画しました。

「竹は、父兄が近くの荒れ放題だった竹やぶから切り出し、1週間前から準備したもの。大変なことですが、それ自体も楽しみましょうと。結果として、子どもたちも本当に喜んでくれた、いいイベントになりました」

遊び心に満ちた仕掛けで、大人も子どもも自然豊かな地域の良さや、まだまだ知らない暮らしの楽しみ方があることを知る機会となりました。今後も、間伐材を使った親子での薪割りなど、自然を活用したイベントを計画中です。

イベントを通して田中さんは地域の大きな可能性を感じたと言います。それは準備や運営を手伝ってくれた大窪孝信さんなど地域の人たちの存在です。

「共に汗を流して地域のために働くとする魅力的な人がいるからこそ、ここで頑張ろうと思えたんです」。

今後は、山の仕事を担う若い人材を育て、機械ばかりに頼らない手仕事の良さを伝えていきたいと考えています。

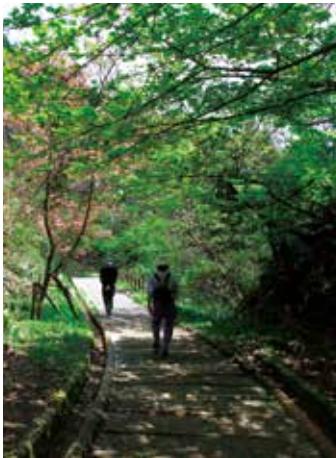


春の古道を、ゆっくり歩く旅。

俱利伽羅の八重桜が満開となるゴールデンウィークには、平安末期に木曾義仲が平家の大群を破った源平合戦の史跡を訪ねてみませんか。なかでも車では行けない「歴史国道（旧北陸道）」や、周辺の古道を歩いてみるのがおすすめです」と話すのは小矢部市観光協会専務理事の森谷義一さんです。

「自然のなかをゆっくり歩けば、八重桜や新緑など春の山の息吹に癒されると同時に、古の歴史を肌で感じることができるのは。現在、「義仲と巴」のNHK大河ドラマの誘致を進めていますが、830年前の歴史の舞台を、ぜひ体験していただけるといいですね」

源平ラインを車で通り抜けるだけでなく、今度はゆっくり、春の古道を自分のペースで歩いてみませんか。



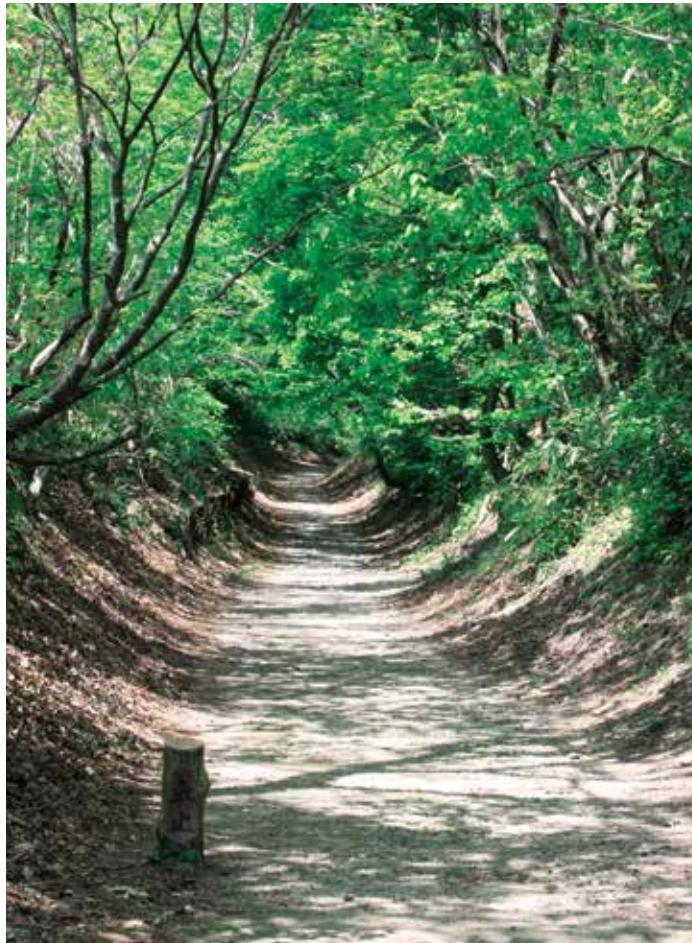
八重桜や新緑に囲まれた道を森林浴しながら歩けば、気持ちもすっきりと、穏やかになっていく。歴史国道「俱利伽羅越え」いにしえの街道（旧北陸道）は、かつて源平合戦「火牛の計」の舞台となり、加賀藩の参勤交代にも使われた道。小矢部市街地側の登り口には、木曾義仲が戦勝を祈願したという1300年の歴史がある国の指定重要文化財「埴生護国八幡宮」がある。途中には数多くの史跡や塚などがあり、さまざまな人や思いが行き交った往事を偲ぶことができる。

●お問い合わせ：小矢部市観光協会

富山県小矢部市本町1-1 TEL 0766-30-2266

<http://www.oyabe.info/sightseeing/sightseeing.html>

八重桜の咲く頃、歴史の舞台で癒されたい。



ゴールデンウィーク前後約2週間が八重桜の見頃。源平合戦や参勤交代の舞台となった歴史国道（旧北陸道）は、新緑と八重桜で彩られる。

小矢部市スローライフ

ひと味違った、
小矢部のランドマークへ。

小矢部市を目指す際にランドマークとなるのが「クロスランドタワー」。地上100mの展望台からは、散居村や北アルプスを一望できます。ドライブ中に立ち寄りたいのが「道の駅 メルヘンおやべ」。特産や野菜などの販売、地元の味を楽しめるレストランのほか、ドッグランのある道の駅として愛犬家に人気です。小矢部特産で県内生産のシェア7割とも言われるバラの花びらを浮かべた足湯は、週末に楽しむことができます。



左上:「クロスランドタワー」は複合施設「クロスランドおやべ」のシンボル。近くの「おやべ温泉タワーの湯」で疲れを癒すのもいい。 右上:「道の駅 メルヘンおやべ」の足湯は、週末にはバラ湯に。 右下:県内唯一のドッグランのある道の駅で、犬をのひのびと遊ばせたい。

●お問い合わせ:クロスランドおやべ 小矢部市鷺島10 TEL 0766-68-0932 水曜日休館(祝日の場合は翌日)、年末年始 <http://www.city.oyabe.toyama.jp/cross/index.html> ●道の駅 メルヘンおやべ 小矢部市桜町1535番地1 TEL 0766-68-3811 営業時間:9:00~21:00 年中無休 <http://www.michinoeki-meruhen-oyabe.com/>



こだわりの特産卵を使った、
あたらしい美味しさを。

富山県内の卵生産量の約8割を占める小矢部市。食料自給率アップと地域農業の活性化を目指して、養鶏農家や米農家、JA、市役所などが一体となり、ニワトリの餌に市内の米農家による餌専用のお米を配合した「小矢部の米(my)たまご」を開発。自身の粘りと黄身の甘みがうれしい新鮮卵は、卵かけごはんによく合いますが、特製プリンなど、多彩なスイーツも誕生しています。



「小矢部の米(my)たまご」のブランドの一つである「とれたて小矢部たまご」を使った「小矢部なめらかプリン」(1個250円)。一口目はさっぱりした味わいだが、やがてコクのあるおいしさに。道の駅メルヘンおやべで販売中。

2月15日、東京・白金台の八芳園で

多数のメディアや流通関係者、人気ブロガーなど約100名を招いて「とやまブランド」をPRするイベント「とやま極上物語」が開催されました。

富山湾のシロエビや富山干柿などの「富山县推奨とやまブランド」11品目をはじめ、「明日のとやまブランド」、「越中富山お土産プロジェクト」越中富山幸のこわけなど、「とやまブランド」を一堂にブースで展示。品質や技術力の高さだけでなく、富山県の自然や奥深い歴史、文化などを交え

「とやまブランド」を育んだストーリーやエピソードも映像などを交えながら紹介され、富山の魅力を立体的に伝えました。

イベントでは、「とやま極上物語」をテーマにした楽しいトークセッションやとやまブランドを使った料理の試食体験も行われました。また、特別ゲストとして、落合務シェフに富山の食や魅力について語っていただききました。

富山の雄大で美しい自然、豊かな歴史や文化、人のたゆみない努力のなかで育まれた品々が、富山の地域イメージを広く発信しました。

とやまストリ...ム

物語とともに紹介された とやまの極上たち。

「とやまブランド」PRイベントで国内外に富山県の魅力を発信。

右上:「とやまブランド」の選定や開発に携わった方々による「とやまブランド」の魅力を語るトークセッション／左上:技術や品質の高さが光る富山县推奨とやまブランド11品目の展示ブース／右下:会場である八芳園のシェフが考案した「とやまブランド」の食材(富山湾のブリ、富山湾のシロエビ、富山干柿)をつかった料理。／中下:食事やトークセッションなど盛りだくさんで、会場は和やかなムードに／左下:7月に「高志の国文学館」にレストランを出店する落合務氏(ラ・ペットラ・ダ・オチアイ オーナーシェフ)のゲストトーク





ごく自然な人の表情を刻む羅漢像。自分に似た像が見つかると言われている。

羅漢とは、釈迦の弟子で仏教を広めた僧侶のこと。釈迦が入滅（亡くなつた）後、正法を伝えた500人の弟子のことを五百羅漢と呼び、人々が信仰するようになりました。

羅漢像は、寛政11年（1799）に富山城下の米穀商で回船問屋の黒牧屋善次郎が寄進したのが始まりです。先祖の供養のために佐渡の石工に像をつくり、北海道へ米を運んだ帰りの船で富山へ運びました。その後、篤志を募り、すべての像が揃うまでに約50年かかったと言います。

とやま・ときの旅語り

富山を彩る、歴史物語を訪ねてみませんか。



富山市・長慶寺 五百羅漢
さまざまな祈りが込められた羅漢像。

この羅漢像は、中腹に、長慶寺の五百羅漢はあります。山の斜面に並ぶ535体の羅漢像は、その表情も実にさまざま。たくさんの思いが込められた、親しみのある顔に出会うことができます。

この羅漢像は、寛政11年（1799）

長慶寺 富山県富山市五艘1882 TEL 076-441-5451

東京で、富山に逢える。 皆様のお越しをお待ちしております！

とやまの発酵 丸の内リトリート ~時間が育む食の旅~

4月11日(水)～22日(日) 11:00～28:00 日曜日は23:00まで

[新丸の内ビルディング 7階 丸の内ハウス] 東京都千代田区丸の内1丁目5-1

フロア内の全飲食店（9店舗）で、富山湾のシロエビやホタルイカなどの富山県産食材を使用したオリジナル料理が味わえます。今回は「とやまの食」を「発酵」を中心に紹介し、期間中、酒や麹のセミナーも開催します。



前回のメニューの一例です。



写真はイメージです。



写真はイメージです。

チューリップ・ファンタジア

～いけばな草月流による、10万枚の花びらの世界～

4月24日(火)・25日(水)

[丸の内ビルディング 1階 マルキューブ] 東京都千代田区丸の内2丁目4-1

いけばな草月流で、チューリップのはなびらを生けます。マルキューブが、約10万枚の花びらで埋め尽くされます。

入善町ジャンボスイカイベント

7月25日(水)・26日(木)

[東京交通会館 1階] 東京都千代田区有楽町2丁目10-1

日本一の大きさの入善ジャンボスイカが東京にやってきます。入善ブラウンラーメンなども販売。

 いいモノ、
いいコト。



お祝いや贈答品用の獅子頭。このほかに天神様、欄間などが井波彫刻を代表する工芸品です。彫刻師が受け継いだ技や個性によって、表情は実にさまざまです。

井波彫刻協同組合 富山県南砺市北川1733
Tel 0763-82-5179

かたちではなく、技を伝えて。

瑞泉寺の門前町として栄えた南砺市旧井波町。幾度かの火災で焼失した瑞泉寺でしたが、特に江戸時代中期の火災の後、本堂の再建にあたって派遣された京都本願寺の御用彫刻師・前川三四郎に、地元大工の田村七左衛門らが彫刻の技法を習ったのが井波彫刻の始まりです。七左衛門が手掛けた瑞泉寺勅使門の「獅子の子落し」は、日本彫刻史の傑作とされています。

その技を240年以上にわたって受け継いでいるのが、現在の井波彫刻です。200種類以上のノミや彫刻刀で彫られていく高度な技は、日本各地の寺社や山車に数多く用いられています。時代とともに求められるかたちは変わっても、受け継がれた技術そのものは変わることはありません。現在も約300人の彫刻師たちが、伝統の技と誇りを守りつづけています。

富山県推奨とやまブランド

井波彫刻品

いなみちょうこくひん



プレゼント アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で5名様に、井波彫刻「獅子ストラップ」をプレゼントします。